

京都會學經濟學大國帝國學

經濟論叢

第一卷 第六十卷

大正二十一年一月一日發行

新餘剩價值説及社會階級協和論	法學博士	田島 錦治
租稅配分 <small>ひきか</small> に於て公益逆比の原則	法學博士	神戸 正雄
個人と團體との關係	法學博士	財部 靜治
サン・シ モンの社會改造哲學と社會連帶思想	文學博士	米田 庄太郎
マルクスの階級概念	文學博士	高田 保馬
物價調節對米價調節問題	法學博士	戸田 海市
資本論中 <small>一或る</small> の各種版本 <small>に於ける</small> 異同 <small>について</small>	法學博士	河上 肇
今後の植民政策の基準	法學博士	山本 美越乃
農業勞働自治組合制	法學博士	河田 嗣郎
營業稅改正論	法學博士	小川 郷太郎
物價問題の統計的研究	法學士	汐見 三郎

資本論中或る一句の各種版本における 異同について

河 上 肇

各種版本の異同

一、マルクスの資本論第一卷第一篇第一章の一、労働價值説の根據を論せる條下を見るに、カ
ツキー普及版^いの第五頁には、次の如く述べてある。

Eine besondere Ware, 1 Quarter Weizen zum Beispiel, tauscht sich in den verschiedensten Verhält-
nissen mit andern Waren aus, zum Beispiel mit 20 Pfund Stiefelwischse oder mit 2 Ellen Seide oder
mit $\frac{1}{2}$ Unze Gold usw.; dennoch bleibt der Tauschwert des Quarters Weizen unverändert, ob in
Stiefelwischse, Seide oder Gold ausgedrückt. Er muss also einen von diesen verschiedenen Ausdrucks-
weise unterscheidbaren Gehalt haben.

『特種の商品、例へば一クオータアの小麦は、極めて種々なる關係において、他の商品と、例へ
ば二十ポンドの靴墨と、又は二エツルの絹と、又は半オンスの金等と交換される、けれども一ク
オータアの小麦の交換價值は、靴墨で、絹で、又は金で表現されても、依然變りはない。だから

其れは、此等種々なる表現方法を區別さるべき一つの内容を有たねばならぬ。』

二、ところが高島素之氏の譯本を見ると、之に相當する場所に、次の如き文句が置かれてある。²⁾

『一定の商品、例へば一クォーターの小麥は、 x 量の靴墨、 y 量の絹、 z 量の金、約して云へば、種々様々な比例に於ける他の商品と交換される。されば小麥は、單一の交換價值のみを有するものでなく、多数の交換價值を有してゐるのである。然るに x 量の靴墨は、 y 量の絹や、 z 量の金などと同じく、總べて一クォーターの小麥の交換價值であるから、 x 量の靴墨、 y 量の絹、 z 量の金などは、互に置換へ得る若しくは互に其大さを等しうする交換價值であらねばならぬ。そこで第一に斯う云ふ結論が生ずる。即ち同じ一商品の、有效なる諸交換價值は、一箇の等一物を表章する。然るに、第二、總じて交換價值なるものは、其れ自身を區別し得らるゝ、或内容の表章法即ち「現象形態」たり得るのみである。』

之を前に掲げた私の譯文を比較すると、其處には著しき差異がある。しかし其の或者は譯し方の相違に本づく差異であるから、試に原文について、私の前の譯文と同じ流儀で之を譯しかへて見ると、それは次のやうになる。

『一定の商品、例へば一クォーターの小麥は、 x の靴墨と、又は y の絹と、又は z の金等と、簡単に言へば、極めて種々なる比例において他の諸商品と、交換される。だから小麥は、唯一の

交換價値の代りに、多様な交換價値を有する。けれどもその靴墨も、その絹も、その金等も、等しく一クオータアの小麥の交換價値であるから、その靴墨、その絹、その金等は、互に置き換へられ得る、又は互に同じ大さの、交換價値であらねばならぬ。だから第一に次のことが生ずる。同一の商品の die gegüßigen Tauschwerte は、ein Gleiches を ausdrücken する。ところで第二には、überhaupt に、交換價値は之を區別し得らるゝ一の内容の die Ausdrucksweise, die „Erscheinungsform“ たり得るのみである。』

私の此の譯文は、高島氏のそれより可いといふわけでは少しもない。ただ獨逸語の原文を掲げる代りに、成るべく原文に即して寫生的に譯出したといふまでである。だから重要な言葉はわざと原語のまゝにして置いた。

高島氏の用ひられた原文は第六版であるが、それは第四版と全然同じものである。さうして其の前の第三版は多少の相違を存する筈であるが、今問題としてゐる一句については、多分第三版も第四版と全く同じであらうと思ふ。(この短篇を執筆する際、私は第三版を檢閲する便宜を有たなかつたが、しかし問題としてゐる一句については、第三版も第四版も同じであらう、と想像し得る理由がある、それは後に述べる。)

三、ところで、私の前に掲げたカウツキ一の普及版にある文句と、高島氏の譯本に用ひられた

第六版の原本(従て第四版以下の、恐らくはまた遡りて第三版の原本)にある文句と、此の如く甚しき差異を示してゐると云ふことは、頗る吾々の注意を惹くに足る事柄である。何故といふに、それはマルクスの労働價値の眞義を理解するために、可なり重要な關係を有てる一句についての用語の甚しき相違であるから。

そこで私は、他の譯本及び版本を調べて見たいといふ氣を起した。その結果確め得たところだけを簡單に報告するのが、此の短文の趣旨である。

先づ第一に英譯本を見る。讀者の知らるる如く英譯本には二種あるが、舊譯の方³⁾を見ると、それは次の如くなつて居る。

A given commodity—e. g., a quarter of wheat—is exchanged for x blacking, y silk, or z gold, etc.; in short, for other commodities in the most different proportions. Instead of one exchange value, the wheat has, therefore, a great many. But since x blacking, y silk, or z gold, etc., each represent the exchange value of one quarter of wheat, x blacking, y silk, z gold, etc., must, as exchange values, be replaceable by each other, or equal to each other. Therefore, first, the valid exchange values of a given commodity express something equal; secondly, exchange value, generally, is only the mode of expression—the phenomenal form, of something contained in it, yet dis-

3) 私の見たのは The Humboldt Library of Science の135號として1890年九月に尙にされたものの第2頁である。(The Bellamy Library に收めてある The Theory of Value, p. 3. も同じことである。)

tingnishable from it.

これは原本第三版からの翻譯であるが、更に原本第四版によつてウンタアマンが訂正増補した新譯⁴⁾の方を見ても、此處は此のままになつて居り、且つ其等は總て、高畠氏の譯文と、同じ内容のものである。この原本第三版からの英譯が、第四版からの英譯と同じことになつてあると云ふことから、前に一言しておいたやうに、原本の第三版と第四版とは、吾々が問題としてゐる一句について、恐らく同じことに爲つてゐるだらうと、私は想像するのである。

四、つぎに和蘭譯を調べて見る。私が見たのは『世界文庫』(World Bibliothek)に收められてゐる一九二二年の第三版⁵⁾であるが、その序文によると、翻譯の臺本は原本第四版であり、従て高畠氏の譯文、二種の英譯文等と、その内容は同じである。

序ながら、此等の諸譯本において、原文の die geldigen Tauschwerte は何を譯出してあるかと云ふに、蘭譯には de geldende ruïwaarden としてあり、英譯には the valid exchange-values としてあり、高畠氏の日本語には『有効なる諸交換價值』としてある。

五、ところが佛蘭西譯を見ると、以上述べた何れのものとも相違して居る。即ち次の如くである。(私は大原社會問題研究所の久留間學士が同所の藏本について次に掲ぐる一文を報道して下さつたことを、序ながら茲に感謝する)。

譯本論中或る一句の各種版本における異同について

第十六卷 (第一號 一五三) 一五三

4) Kerr 會社の版本, p. 43.

5) Het Kapital, vertaald door F. van der Goes, p. 5.

Une marchandise particulière, un quarteron de froment, par exemple, s'échange dans les proportions les plus diverses avec d'autres articles. Cependant sa valeur d'échange reste immuable, de quelque manière qu'on l'exprime, en x cirage, y soie, z or, et ainsi de suite. Elle doit donc avoir un contenu distinct de ces expressions.⁶⁾

『特定の商品、例へば一クオーターの小麥は、極めて種々なる比例において、他の物品と交換される。けれども其の交換價値は、 x の靴墨、 y の絹、 z の金、その他のものにより、如何なる方法で表現されやうとも、依然として變りはない。だから其れはその表現を區別するべき一つの内容を有たねばならぬ。』

この佛譯は原本第一版から行はれたものであるが、それはマルクスが自身で之を校閲し、且つ其の校閲に際しては原本の訂正増補をも試みたものである。だから其れは『原本と共に一の特別な學問的價値を有つ』とマルクス自身も言つてゐるのであるが、しかし今吾々が問題としてゐる部分は、殆ど原本第二版そのままの翻譯になつてゐるやうに思はれる。

六、しからは原本第二版の文句は何うなつてゐるか云ふに、その全文は次の如くである。⁷⁾

Eine einzelne Waare, ein Quarter Weizen z. B. tauscht sich in den verschiedensten Proportionen mit andern Artiteln aus. Dennoch bleibt sein Tauschwerth unverändert, ob in x Stiefelwichse, y Seide,

6) Le Capital, par Karl Marx. Traduction de J. Roy. 1873, P. 14.

7) 1872, S. 11.

z Gold u. s. w. ausgedrückt. Er muss also einen von diesen verschiedenen Ausdrucksweisen unterschiedbaren Gehalt haben.

之を前に掲げた高島氏の日本譯、英譯、蘭譯、乃至原本の第四版以下(第三版を含めて差支なからん)と比較すると、そこに甚しき相違があることを發見する。文章がずつと簡潔になつて居る上に『同一商品の等しい諸交換價値は等しい物を表現する』といふ句に相當するものゝ痕跡だも無いことが、特に吾々の注意を惹く。

七、なほ序に原本の第一版⁹⁾を見ると、(大原社會問題研究所の所藏本による、私は此の點についても之を教へて下さつた久留間學士に甚だ感謝の意を表する)、それは次の如くなつてゐる。(アンダーラインを施した所は、原文に字註を明けてある部分)

Eine einzelne Waare, ein Quarter Weizen z. B. tauscht sich in den verschiedensten Proportionen mit andern Artikeln aus. Dennoch bleibt sein Tauschwerth unverändert, ob in x Stiefelwiche, y Seide, z. Gold u. s. w. ausgedrückt. Er muss also von diesen seinen verschiedenen Ausdrucksweisen unterschiedbar sein.

即ち第一版と第二版と相違してゐる所は、ただ最後の一句が、第一版では『だから其れは、其のものゝ此等種々なる表現方法を區別されねばならぬ』となつて居り、第二版では其れへ『内容』

資本論中或る一句の各種版本に於ける異同について

第十六卷 (第二號 一五五) 一五五

の語が追加されて、『だから其れは、此等種々なる表現方法を區別さるべき一つの内容を有たねばならぬ』となつてゐるだけの事である。

八、そこで最後に翻つて、此の拙稿の冒頭に掲げたカウツキーの版本と原本第二版とを比較して見ると、多分同じであらうと思つた私の豫期に相違して、些細な點についてはあるが、そこに若干の差異が発見される。即ち原本第二版には *eine einzelne Waare* と書き出してある部分(佛譯に *Une marchandise particulière* となつて居る部分)が、カウツキー版では *eine besondere Ware* (他の版本では *eine gewisse Ware*) となつてゐる。又原本第二版には *Proportionen* (佛譯も同様) といふ文字や *Artikel* (佛譯も亦た同様) といふ文字が使つてゐるのに、カウツキー版では其れが *Verhältnisse* となり又た *Ware* となつて居る。それからカウツキー版では『例へば二十ポンドの靴墨と、又は一エツレの絹と、又は半オンスの金等と』としてゐる所が、原本第二版では全く落ちて居り、その代りカウツキー版で『クオイクアの小麦の交換價值は、靴墨で、絹で、又は金で表現されても、依然變りはない』としてゐる所が、原本第二版では『そのもの、交換價值は、その靴墨、その絹、その金等で表現されても、依然變りはない』となつてゐる。此等の差異は、事の内容に殆ど何等の關係を有たぬのであるが、只だ私は、カウツキーの普及版が原本第二版とも可なり相違してゐると云ふことの一例として、此等の點を指摘して置くだけの事である。

其等異同の意義

以上を以て私は各種の版本に見はれた異同を明かにした積りである。仍て以下簡單に、この一句の變遷の上に現はれた意義並びに各種版本の價値を略述して、この短篇を終らうと思ふ。

一、第一版及び第二版は言ふまでもなくマルクス自身の書いたものであるから、本文に疑のあり得る筈はない。さうして第一版と第二版との相違、即ち第一版には、商品の交換價値は其の種々なる表現方法を區別されねばならぬとしてある所が、第二版では、商品の交換價値は其の種々なる表現方法を區別し得らるゝ一の内容を有たねばならぬと爲つてゐるをいふことは、マルクスが交換價値と價値とを區別し、前者を以て後者の『現象形態』となすといふ趣意が、改版に際しより明かになつてゐることを意味するものである。

二、第二版の次にくるものは佛譯であるが、これは前に述べた如く、第二版と略ぼ同じであるから、別に問題はない。たゞ茲に注意すべきことは、マルクス自身が生前に眼を通したものは、この佛譯を以て終りとすると云ふことである。

三、ところが第三版になると(第二版は前に述べた理由により、第四版以下のものと、茲に問題としてゐる部分については、全く同一だと推定する)そこに甚しき相違が現はれて來る。その

一は、第二版には、商品の交換價值は『其の種々なる表現方法を區別し得らるゝ一の内容を有たねばならぬ』としてある所が、第三版では、『總じて交換價值は之を區別し得らるゝ一の内容の表現方法、現象形態たり得るのみである』となつてゐると云ふことである。交換價值を以て價值の現象形態に過ぎずとなす思想が、第二版よりも更に一層明白になつてゐる。第二版と第三版との間における著しき相違の第二は、第三版において、第一版には全く無かつたところの『同一商品の唯言な諸交換價值は、一の等一物を表現する』といふ文句が發見されることである。この句において特に吾々の注意を惹くことは、交換價值の上に唯言なる形容詞が添附されてゐることである。私は此の唯言なる語に含まれたマルクスの真意を的確に理解することが出来ないから、わざと日本語に譯しないのであるが、しかし其の唯言な交換價值といふのが有らゆる現實の交換價值を意味しないことだけは明かである。マルクスが茲で第一、第二と列擧してゐる文句のうち、第一のところ、即ち種々なる交換價值が一の等一物を表現すると言つてゐる所では、交換價值の上へ特に唯言なる形容詞を用ひ、之に續いて第二のところ、即ち交換價值は之を區別し得らるゝ一の内容の現象形態たり得るのみと言つてゐる所では、その交換價值をば唯言なる形容詞で限定することの代りに、却てEberhauptにと言つてゐるのは、恐らく偶然の違ひではあるまい。彼れの意見によれば、あらゆる現實の交換價值は之を區別し得らるゝ一の内容（即ち彼れの所謂

價值)の現象形態であるが、同一商品のあらゆる現實の諸交換價值が一の等一物(即ち同じ大きさの價值)を表現するのではなく、その然ることを得るのは同一商品の諸々の交換價值のうち唯三つなものに限られるのである。何故さうでなければならぬかと云ふことの理由は、勿論其處では明瞭にされてゐないけれども、私は彼が此の場合、『單なる商品』(資本家的商品にあらざるもの)を眼中に置きつゝあるものを考へる。さうして彼が此處で唯三つな交換價值を謂つてゐるのは、『人類全體の立場から見て互に交換され得る價值』といふほどの意味だと解する。その事は拙著『社會問題研究』第四十冊(大正十一年十二月發行)において詳述して置いたから、茲には繰返さない。

私は第三版以後に現はれてゐる新たな文句の意味を、大體以上の如くに解釋する。しかし此の第三版以下の文句が果して忠實にマルクスの意志を傳へてゐるか何うかについては、多少の疑がないでもない。何故といふに、第三版はマルクの死後エンゲルスの公にした改訂版で、マルクスが生前に眼を通し得なかつたものだからである。マルクスは一八八三年の三月十四日に永眠した。さうしてエンゲルスは、同年十一月七日の日附を以て、資本論第三版の序に次の如く述べてゐる。⁹⁾

『マルクスは最初、第一卷の本文を大部分に亘つて書き換へ、理論方面に關係した數箇の點を一層鋭く言ひ現はし、新たに數箇の點を追加し、更に歴史上及び統計上の材料を最近の分まで

資本論出或る一句の各種版本における異同について

補足しやうと目論んでゐた。所が彼れの病氣を第二卷の編輯締切りの切迫とは、遂に彼をして此の最初の企圖を斷念せしめた。そこで已むを得ず、最も切要な點だけを變更し、又た當時發行された佛蘭西版の中に既に含まれてゐる、數箇の補遺のみを新たに挿入すると云ふことになつた。……彼れの遺稿中には、彼が所々訂正し、また佛蘭西版に参照を施した獨逸版も一部あつた。同様にまた、利用すべき箇所も精密に印しづけた佛蘭西版も一部あつた……』。

エンゲルスは此等の材料を根據として、第三版の上に訂正を施したのである。だから其處に若干の懸念が置かれ得ないことも無いのである。しかしエンゲルスは同じ序文のうちに、『此の第三版においては、原著者みづから確かに其れを變更したであらうと予に信ぜられぬ箇所は、一語たりとも變更されては居らぬ』と言つてゐるから、大體において安心して差支あるまいと思ふ。

四、英譯及び蘭譯は、吾々が問題としてゐる一句については、原本第三版以下と同じであるから、別に問題はないが、ただ近頃公にされたカウツキーの版本が、以上の何れとも相違してゐることは、果して如何なる理由に本づくのであらうか？ それは私には十分に解り兼ねるが、只其れが原本の第一版又は第二版に餘程近づいてゐる所を見ると、マルクスが第一版(或は第二版)の原本にペンで訂正を施して置いたものを、利用したのでは無いかと思はれる。カウツキーが其の普及版の前置に述べてゐる所によれば、原本の第二版にマルクスが筆を入れて置いたもの(現に

獨逸社會黨の藏本となつてゐるもの)を見ると、エンゲルスはマルクスの手書を盡く利用してはゐないと言ふことだが、しかし今問題としてゐる句については、エンゲルスの訂正版の中で重要な變更が施されてゐるのだから、此の部分はエンゲルスがマルクスの手書を十分に利用しなかつた所たゞは推定し難い。それならカウツキの版本は何に據つたものだらうかと考へて見るに、彼が同じ前置のうちに言ふ所によれば、獨逸社會黨の藏本中には、マルクスの第二版の書き入れ本の外に、第一版の書き入れ本で、是れまでの版に全く顧られなかつたものが、今一冊あつて、それには「マルクスが書き誌しておいた種々な變更及び増補」が發見されるが、自分は其れをも利用したとしてゐるから、私は多分その第一版の書き入れ本が——問題の一句については——丁度カウツキ版のやうになつてゐるのでは無いかと思ふ。しかし之は單純な推測であつて、確なことはベルリンへ出かけて社會黨の文庫を見せて貰はねば分らぬのである。

之を要するに、私が問題にした一句が、各種の版本を通じて斯様に種々の異同を呈してゐると言ふことは、マルクスが此のあたりの説明を最後まで氣にして居り、自分の考がまだ十分にはつきりしないとか又はその言ひ現し方が十分にはつきりしてゐないとか思つてゐた證據となり得るのであつて、甚しく些細なことではあるが、私にとつては相當興味あることに感ぜられた譯である。